

空海 1

年表

六一八	唐 建国される。
六二九	玄奘三蔵長安を発つ（三年余の旅の後インドに到達）
六三二	「九成宮醴泉銘」
六四五	玄奘三蔵インドより帰国（以後20年余の間に76部1347巻の経を翻訳した。） 「大化の革新」（六四六）
六五三	「雁塔聖教序」
七一〇	平城京遷都
七一六	インドの密教僧善無畏（シユバカラシンハ）長安に来る。
七三六	インドの密教僧金剛智（ヴァジュラボーディ）長安に入る。
七四六	金剛智の弟子の不空（アモーガヴァジュラ）インドから長安に帰る。
七五五	安史の乱（安禄山と史思明の乱・（七六三））
七六二	玄宗皇帝没
七七〇	李白没
七七二	杜甫没
七七四	白楽天誕生
七七八	空海誕生 不空没
七八四	柳公權誕生
七八五	長岡京遷都
七八六	顔真卿没
七九一	大学入学後二年（？）ほどで大学を退学。
七九四	平安遷都
七九七	『鑒聲指帰』を著す。
八〇三	4月遣唐使船出発したが嵐のため帰還。
八〇四	3月再び遣唐使船渡航準備完了。
八〇五	4月東大寺戒壇院で受戒し遣唐使の一員に選ばれた。（空海の資格は仏教研究を目的とする正規の留学僧。 期間20年）5月12日大阪を出港。6月博多津を出る。7月6日日本を出発。8月10日福州の赤岸鎮に漂着。 11月3日長安へ向かう。12月23日長安に入る。
八〇六	2月11日西明寺へ入る。5月頃青龍寺の惠果和尚を訪ねる。6月上旬大悲胎藏の学法灌頂を受ける。7月 上旬金剛界の灌頂を受ける。8月上旬伝法阿闍梨位の灌頂を受ける（免許皆伝にあたる）。遍照金剛の灌頂名 を授かる。12月15日惠果和尚入滅。『三十帖策子』書かれる。
八〇九	3月長安を出発。帰国の途につく。3月17日桓武天皇没。4月越州に到る。5月18日平城天皇即位。8月 明州を出港。10月帰朝。九州の大宰府に滞在。10月22日付けで『請來目録』を朝廷に奉る。 4月13日平城天皇退位し嵯峨天皇即位。7月中旬都に入り、高雄山寺（神護寺）に住む。



(別紙)

井大士一堂之像假名井某
六條幅也年在弘承元年
御臺ある三月委寄石舟所舍
啟據隨地多依舊亦昔所住
才以畫不肖性清冷自然
井大士一堂之像假名井某
十六井大士相文自恣象上之是
自恣秀達被縛子心無脫

摩訶吠室囉求那野提婆喝囉闍
羅尼儀軌一卷般若所揭羅摩

畫像品第一

井有善男善女人堂持此隨羅
尼者先須畫其畫像時彩色

中輒不得着皮釋唯用香汁
自月一日請至清潔深洛持齋是
八戒出入时須三具衣著上廁即香
湯沐浴上莫論多用少便取細

日體身無白疕好細相二得一五

便 清 無

至

「請來目録」大同元年（八〇六）十月二十一日

平城天皇に宛てた帰国報告書。「新請來の經等を上る表」という上表文と請來品の「目録」から成る公文書。

一 「新請來の經等を上る表」

二 「目録」

第一部 書籍の部

(一)新訳等の經 142部247卷

①不空訳 118部150卷

②般若訳 4部61卷（内新訳の「華嚴經」40卷）

③勿堤犀魚訳 1部1卷

④尸羅達摩訳 2部10卷

⑤無能勝訳 2部3卷

(二)梵字真言讚等 42部44卷

(三)論疏章等 32部170卷

第二部 図画・器物の部

(一)仏・菩薩・金剛・天の図像、曼荼羅、

阿闍梨影など十鋪

(二)道具、九種

(三)阿闍梨付属物、十三種

上新請來經等目録表

入唐學法沙門空乘言空乘以去

返曆廿三年衡

命留學之末閏

津萬里之外其年臘月得到長安

廿四年二月十日准

勅配住西明寺

爰則周遊諸寺訪擇師依幸遇青龍寺

灌頂阿闍梨法號惠果和尚以為師

主其大德則大興善寺大廣智不空

三藏之付法弟子也弋釣經律該通

（三十帖策子より）

第四說一切如來廣大 三十七彼中聖衆各止

最澄筆写本（東寺藏）（八一二—八一三年頃）

帝屬北極而不厭智和尚八百不老崇
惠禪師權耶支傾法之不思議者過
斯藏乎慕覺之徒願聞未聞

頃日

法無行藏隨人方來似寶難得得則心開
投身半偈空論珍財故書寫其來悠哉
願此介福國泰人蕃一聞一見並蒙脫煩
大同元年十月廿二日空學法沙門空乘

「請來目録」と言われるもので、現存している最古のものは、最澄の請來目録、ついで空海のものである。

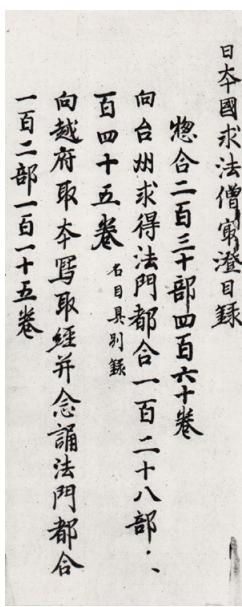
縦 27 cm

「肘行膝歩」して未だ学ばざるを学び、稽首接足して聞かざるを聞く。」

（稽首）からだを曲げ、頭を地に付けて行う礼。ぬか

づくこと。高い敬意を表す。

（接足）五体投地。最高の敬意を表す礼法。両膝・両肘（ひじ）・頭を地に着け、手と頭で相手の足を頂くようにする。



28.5×398 cm

最澄の請來目録

越州錄（八〇五）

日本國求法僧最澄目録

總合二百三十部四百六十卷

向台州求得法門都合一百二十八部、

百四十五卷

向越府取本寫取經并念誦法門都合

一百二部一百一十五卷

二王と歐陽詢、褚遂良を学んでいる。
集王聖教序の影響大。

重字二字			
梵字	読法(中天音)	梵字	読法(中天音)
ଲାମ	ラン lam	କ୍ଷା	キシャ ksa

ତ	タ ta	ଥ	タ tha
ଦ	ダ da	ଧ	ダ dha
ନ	ナウ na		
ପ	ハ pa	ଫ	ハ pha
ବ	バ ba	ଫ	バ bha
ମ	マウ mu		
ୟ	ヤ ya	ର	ラ ra
ଳ	ラ la	ର	バ va
ଶ	シャ sa	ଷ	シャ sha
ଷ	サ sa	ଷ	カ ha

体文 三十三字

梵字	読法(中天音)	梵字	読法(中天音)
କ	キヤ ka	ଖ	キヤ kha
ଗ	ギヤ ga	ଘ	ギヤ gha
ନ	ギヤ na		
ପ	ギヤ pha		
ବ	ギヤ pha		
ମ	シヤ ca	ଚ	シヤ cha
ଯ	シヤ ca		
ର	ジャ		
ଜ	ジャ ja jha	ଝ	ジャウ na
ର	タ ta	ଠ	タ tha
ଦ	タ da	ଢ	タ dha
ନ	タウ na		

摩多 十二字・別摩多 四字

梵字	読法(中天音)	梵字	読法(中天音)
ଅ	ア a	ଏ	ア—a
ଇ	イ i	ଏ	イ—i
ଉ	ウ u	ଏ	ウ—u
ୟ	エ—e	ଏ	アイ ai
ୱ	オ—o	ଏ	アウ au
ଅନ	アン an	ଅକ	アク ah
ରି	リ r	ରି	リ—r
ରିଲ	リル l	ରିଲ	リル l

朴筆体梵字字母例

ଅ	ଅ	ଇ	ଇ
ଅ	ଅ	ଇ	ଇ
ଅ	ଅ	ଇ	ଇ
ଅ	ଅ	ଇ	ଇ
ଅ	ଅ	ଇ	ଇ

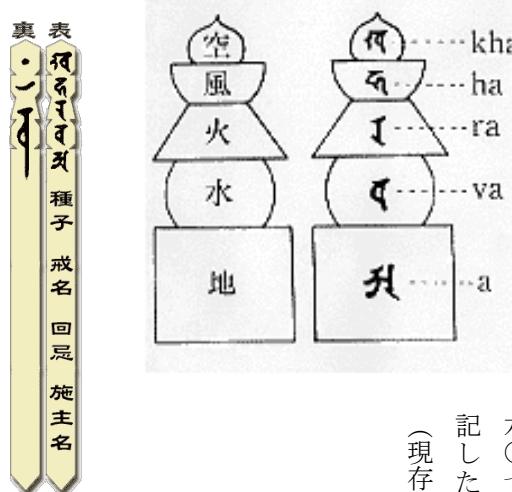
空海 筆「七祖像贊」より 部分

飛白體と梵字

「法隆寺貝葉」『梵字般若心經并尊勝陀羅尼』

梵文

			ラ	バ	ア
漢字	空	風	火	水	地
色	青	黒	赤	白	黄
形	宝珠形	半月形	三角形	円形	正方形



六〇七年遣隋使小野妹子が多羅葉に
記したインドの經典をもたらした。
(現存する世界最古の貝葉写本)

五輪の塔

地 (ア)・水 (バ)・火 (ラ)・風 (カ)・空

(キヤ) を表しています。下から順に地、

水、火、風、空を表わしています。



法隆寺貝葉

法隆寺貝葉



梵

梵

曼荼羅

ほんご

古代インドのサンスクリット語（梵語）の「マンダラ」を漢字で音写したもの。

「マンダ」+「ラ」の合成語。「マンダ」は中心、心臓の意。本質を表わす。

「ラ」は所有、得る、円の意。旧訳では「壇」、新訳では「輪円具足」、「聚集」という。

「本質をそなえたもの」、「すべての法を具足しているもの」、「さとりを有する場」等という意。

密教的宇宙の根源が表現されている。仏教では宇宙のことを「法界」と言う。

「密教」とは秘密仏教のことと「顯教」と対である。

曼荼羅には両界曼荼羅、砂曼荼羅、別尊曼荼羅など多くの種類がある。

空海は大・三・法・羯の四種の曼荼羅を将来した。

大曼荼羅

（絵図の曼荼羅。五色で彩色したもの。両界曼荼羅など。）

三昧耶曼荼羅

（梵語の三昧耶は約束・契約という意。諸尊の持物（三昧耶形）で仏を表現している。）

法曼荼羅

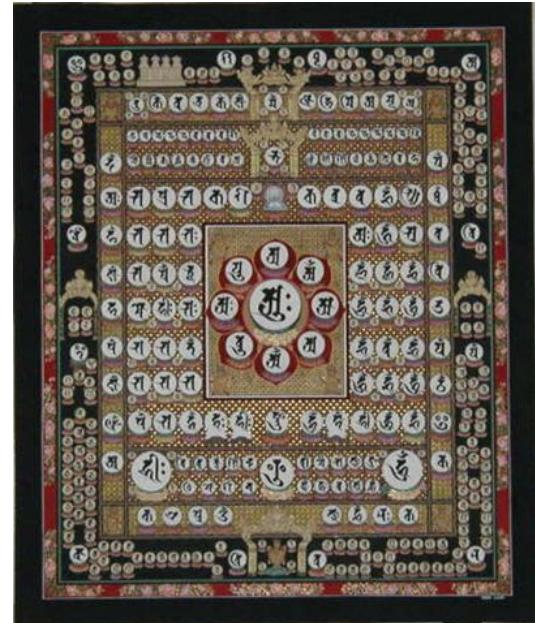
（梵字で描かれているもの。種子曼荼羅、文字曼荼羅などという。）

羯磨曼荼羅

（立体曼荼羅。梵語のカルマンを漢字にしたらしい。カルマンには活動、作用、行為、働きという意味がある。すべてのものは活動体で、静止しているものはないという意。東寺講堂の二十一体の仏像。）

胎藏界種子曼荼羅
(法曼荼羅)

隆三世三昧耶会
(三昧耶曼荼羅)



胎藏界種子曼荼羅
(法曼荼羅)



金剛界種子曼荼羅
(法曼荼羅)



東寺立体曼荼羅
(羯磨曼荼羅)



隆三世三昧耶会
(三昧耶曼荼羅)

両界曼荼羅（両部曼荼羅）

胎藏（界）曼荼羅

（宇宙の物質的生成原理である五大に視点を置く。理の曼荼羅と言われる。理とは客体、客観世界の意。）

金剛（界）曼荼羅

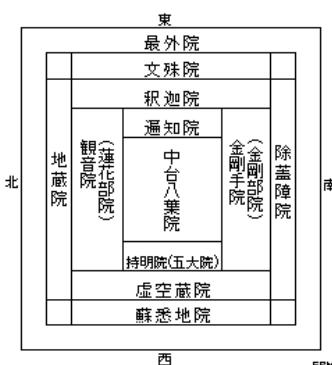
（精神的原理としての識大に視点を置く。智の曼荼羅と言われる。智は識のことで主体、主観世界の意。）

（注）胎藏曼荼羅は大毘盧遮那成仏神変加持經（大日經）、金剛曼荼羅は金剛頂經の諸經典により諸尊を配置したものである。

胎藏曼荼羅（国宝）



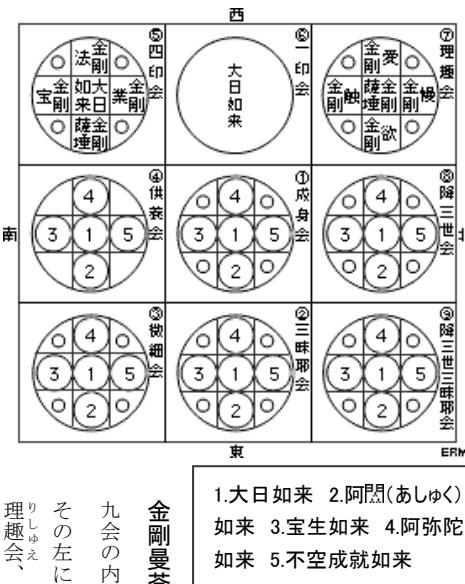
金剛曼荼羅（国宝）



胎藏曼荼羅の構造



中台八葉院



- 1.大日如来 2.阿闍(あしゅく)
如来 3.宝生如来 4.阿弥陀
如来 5.不空成就如来

金剛曼荼羅の構成

九会の内その中心となるのが成身会（中央）であり、その下方に三昧耶会（東）、その左に微細会（南）、上に供養会（西）と四印会、さらに右回りに順に、一印会、理趣会、降三世三昧耶会と続く。



胎藏曼荼羅（九会曼荼羅とも言われる）

慈悲を表す。東曼荼羅（東を上に描き、東方に掛けられる）、理曼荼羅、因曼荼羅とも言われる。大日如来は法界定印を結ぶ。中台八葉院を中心に十二院へ時計回りに展開する。四〇九体の尊像が描かれている。

（中台八葉院）宝幢、開敷華王、無量寿、天鼓雷音の四

仏と四菩薩から成る。

敷曼荼羅（灌頂の時に壇上に敷く曼荼羅）

智慧を表す。西曼荼羅（西を上に描き、西方に掛けられる）、智曼荼羅、果曼荼羅とも言われる。成身会を中心は九会から成る。金剛界五仏・五智如来（大日、阿闍、宝生、阿弥陀、不空成就（理趣）など、金剛界三十七尊をはじめに一四六一体の尊像が描かれている。

（注）敷曼荼羅は大毘盧遮那成仏神変加持經（大日經）、金剛曼荼羅は金剛頂經の諸經典により諸尊を配置したものである。

「請來目録」より（竹内信夫氏訳）

「真言秘藏は經疏隱密にして、図画を仮らざれば相伝すること能わず。」

現代語訳

「真言秘密の教えは經典とか注釈書には明らかには述べられていないので、図像を使わなければ伝えることができない。」

「法はもと言無けれども、言にあらざれば顯われず。真如、色を絶つといえども、色を待つて乃ち悟る。月指に迷うと雖も、提撕極まり無し。目を驚かすの奇觀を貴ばず。誠に乃ち、國を鎮め人を利するの宝なり。しかしのみならず、密藏深玄にして、翰墨に載せ難し。更に図画を仮りて悟らざるに開示す。種々の威儀、種々の印契、大悲より出でて、一観に成仏す。經疏秘略にして、これを図像に載せたり。密藏の要実、これに繋れり。伝法受法、これを棄てて誰ぞ。海会の根源、これ乃ちこれに当れり。」

「諸法無相」（存在の実相は本来、形や色を超えたものである）と「鎮國利人」のためのものである。という空海の考え。

「即身成仏義」
「声字実相義」
「吽字義」

